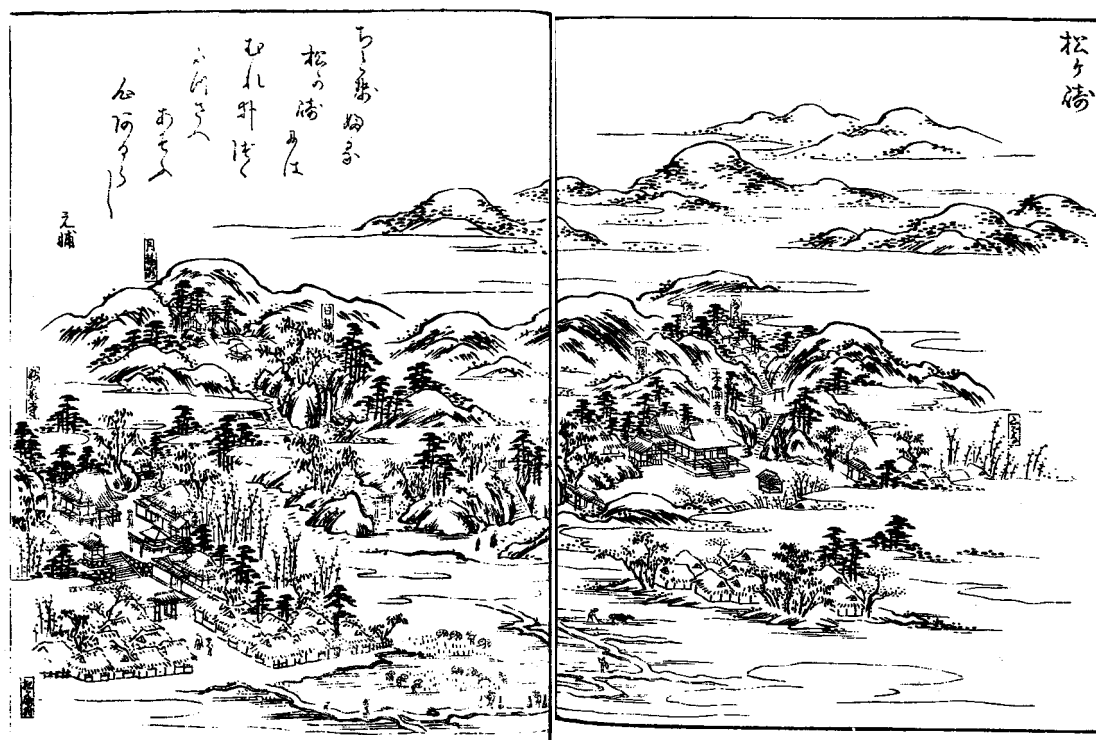


松ヶ崎廃寺跡発掘調査現地説明会資料



江戸時代の松ヶ崎の様子 『都名所図会』[吉野版 初版・安永九年(1789)]

2003年11月1日

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

松ヶ崎廃寺跡発掘調査現地説明会資料

調査地：京都市左京区松ヶ崎堀町40番地 京都市立松ヶ崎小学校敷地内

調査期間：2003年7月1日～継続中

調査面積：約430m²（1期分）

調査主体：財団法人京都市埋蔵文化財研究所

はじめに（図1・2）

調査地は松ヶ崎小学校内の北東部に位置します。調査地の西には植物園北遺跡（古墳時代の集落跡）や西山古墳群、北西には栗栖野瓦窯跡（飛鳥時代から平安時代）、北東の山上には松ヶ崎城跡（室町時代）、北西の林山の山頂には林山遺跡（古墳時代）があります。また小学校北側の山中には、日輪の滝・月輪の滝・七面宮、北東には涌泉寺が位置します。

松ヶ崎小学校は、敷地の大半が「松ヶ崎廃寺跡」として『京都市遺跡地図台帳』に登録されています。松ヶ崎廃寺跡は、『日本紀略』正暦3年（992）6月8日条の「中納言源保光卿供養松崎寺、号円明寺」にある松崎寺＝円明寺であると考えられています。松ヶ崎寺はその後、歡喜寺と寺号を改めました。徳治2年（1307）には当時の住職であった実眼が天台宗から日蓮宗に改宗し、寺号も妙泉寺と改めます。天文3年（1536）年7月の天文法華の乱では、山門宗徒に攻められ松ヶ崎城などと共に焼失しました。しかし、天正3年（1575）には再興され、寺内には5つの塔頭が配置されました。明治8年（1875）妙泉寺と5つの塔頭は合併し、明治9年（1876）には一部が小学校の敷地となります。大正7年（1918）には小学校の敷地拡張にあたって北東側にあった本涌寺と合併し、現在の涌泉寺となりました。

発掘調査の経緯（図2）

松ヶ崎小学校内においては、過去2回の発掘調査が実施されています。

1.1978年の調査 調査地は敷地南西部の現校舎の位置です。調査面積は約120m²で、検出した遺構には室町時代後半から江戸時代にかけての柱穴、溝、土壌（ゴミ穴）、井戸などがあり、土師器、陶磁器、瓦、銭貨、五輪塔などが出土しましたが、寺跡に関連する遺構は検出できませんでした。

2.1993年の調査 現在の給食棟の位置が調査地です。調査面積は約450m²で、室町時代後期から江戸時代にかけての石垣、溝、土壌、石室（地下収納施設）、井戸などを検出し、平安時代から江戸時代にかけての土器、陶磁器、瓦などが出土しました。天文法華の乱の頃の土器や焼土、平安時代の軒丸瓦・軒平瓦も出土しています。石垣は、妙泉寺に関連する可能性が高いと判断され、一部が当校北端の山裾に移築保存されました。

3.今回（2003年）の調査 北東隅にあった校舎（管理棟）の新築工事に伴うもので、2003年7月1日から開始しました。調査の前半では江戸時代の池や水路、路面などを検出し、現在は礎石建物の調査を行っています。また管理棟が解体された跡地についても、11月以後に2期分として調査を予定しています。

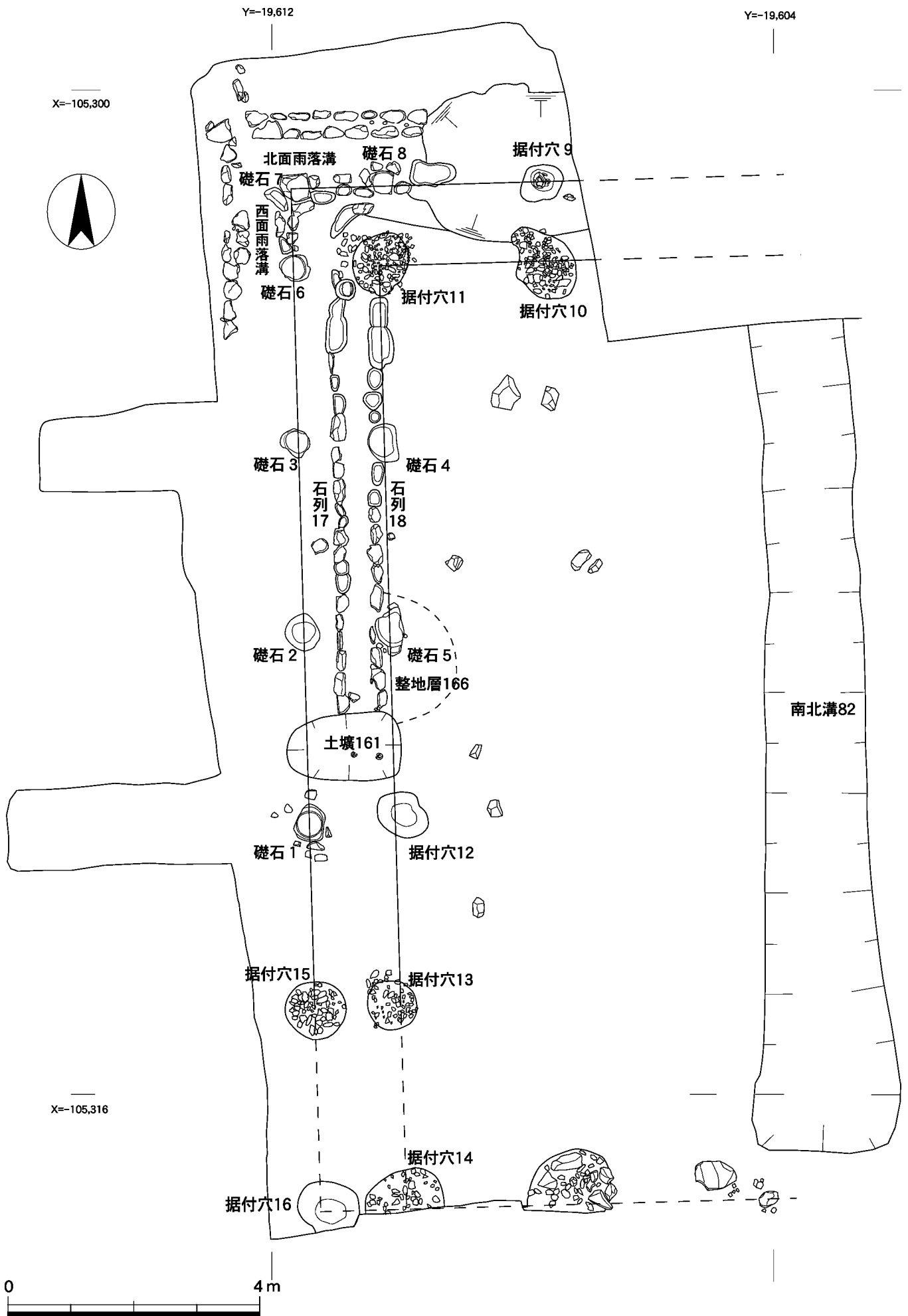


図3 遺構平面図(1:80)

礎石建物と池（図3・4、写真1・2）

調査区の北西部で、花崗岩の^{そせき}礎石、礎石据付穴、雨落溝、2列の石列などを検出しました。礎石列はほぼ南北方向を示し、礎石建物の北西部を検出したと考えています。この他、調査区の南西部では、礎石建物と併存したと考えられる池を検出しました。

礎石列は据付穴も含めて、南北方向に6間以上、東西方向に2間以上あります。西端側と北端側の礎石は、内側の礎石より10cm前後低く据えられており、雨落溝内側の石列と並ぶことなどから、縁を受ける礎石とみられます。西縁は5基の礎石（礎石7・6・3・2・1）が残っていました。柱を受ける円座は、それぞれ直径35cm前後あります。南側の2間（据付穴15・16）は礎石は無く、根固め石が残存していました。北縁の礎石列は、西端と東1間で礎石が残存していました（礎石7、8）。礎石7は北面に円座があり、据え直しがあつたとみられます。さらに東1間で据付穴9を検出しました。

身舎^{もや}と考えられる南北礎石列では、礎石4、5が残存していました。円座は南北に細長く、長径50～60cmあります。北端1間と南の3間は礎石は無く、据付穴11・13・14では根固め石が残存していました。

礎石3・2・1、礎石4・5の南北距離は約3m（10尺）です。これに対して、礎石6と礎石3の南北距離は2.8（9尺強）でやや狭くなっています。縁と身舎の距離は、礎石7と礎石6が1.2m（4尺）、礎石3・4と礎石2・5が1.4（4.6尺）となっています。礎石7は据え直しがあるため、両側とも1.35（4.5尺）であつたと思われます。

雨落溝^{あまおちみぞ}の石列は、北西隅から東・南へそれぞれ約3.5 残存していました。長さ30～50cmの扁平な河原石を用い、外端が直線的になるよう2列並べています。溝の外側と内側の寸法は、北面が1.3 と0.55、西面が1.2 と0.4 あります。また西北隅部は石が空いた状態が見られました。湧水を導き入れるための仕事であつたと思われます。

南北礎石列の間で南北方向の石列18・17を検出しました。東側の石列18は、長さ30cm前後の河原石が礎石5を避けるかたちで約3.5 並んでいます。西側の石列17は約6 残存し、長さ20～40cmの石が据えられています。石列17の延長は、さらに北面にも存在した可能性があります。

調査区の南東部では、江戸時代の池の下層で平安時代の池跡の北岸を確認しました。この池跡は、さらに南に広がります。調査区南端における当初の池底は、江戸時代の池底から約1m、礎石4の上面からは約1.2m下に位置します。

出土遺物

飛鳥時代では須恵器^{すえき}、平安時代では土師器^{はじき}・須恵器・瓦類、室町時代では土師器・陶磁器・瓦類、安土・桃山時代から江戸時代では土師器・陶磁器・瓦類・墓石^{いっせき}（一石五輪塔など）が出土しています。一石五輪塔は、銘文（表）が判読できた5例はいずれも天正の年号が刻まれていました。

まとめ

今回検出した礎石建物は、身舎が南北5間以上、東西1間以上で、西と北には縁と雨落溝がめぐる構造と推定されます。建物基壇は、土を盛り上げて亀腹状の高まりとなつていたと推定されます。石列17・18

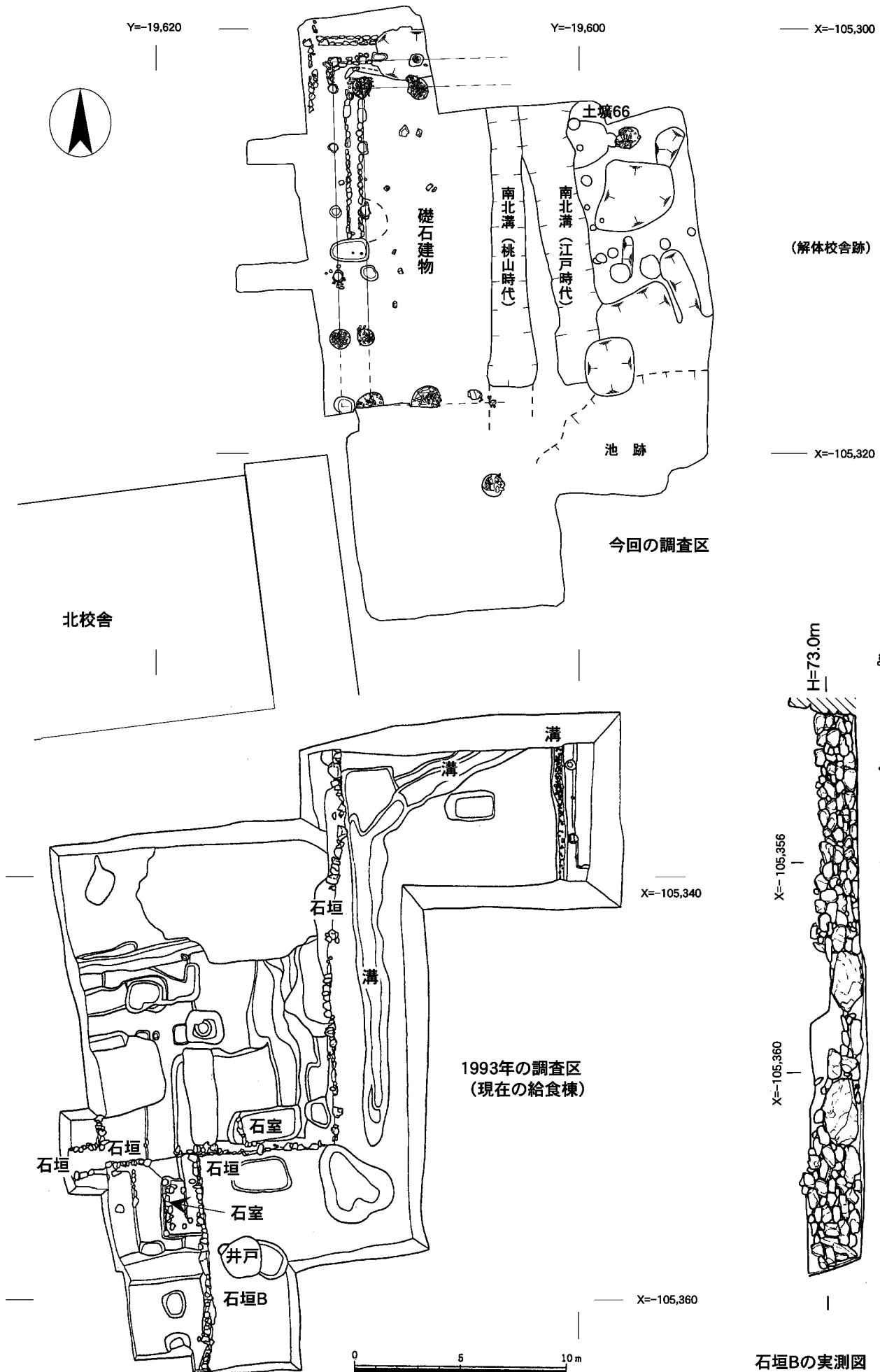


図4 遺構配置図(1:250)

は、基壇土が崩れないために並べた石列とみることもできます。建物中央部では、礎石や据付穴はまったく検出できず、建物の構造を考える上で問題を残しました。また瓦類はほとんど出土しませんでした。

この建物の廃絶時期については、礎石3・2を覆う泥土層、ならびに土壌161（石列17・18を壊す）から16世紀前半頃の土器が出土していることから、焼失した痕跡などはありませんが、天文法華の乱で廃絶した可能性は高いと思われます。創建時期については、土壌161から平安時代後期の軒丸瓦、東側の土壌66から平安時代後期（11世紀末葉）の土器が出土していること、鳥羽離宮跡や六勝寺跡で検出された建物（写真3・4）に構造が類似することから、平安時代後期まで遡ることは確実でしょう。さらに、礎石1の下部には鎌倉・室町時代（14世紀）頃の土器が、礎石5周辺の整地層中からも14～16世紀の土器が出土しており、修復を重ねながら存続してきたことがわかります。したがって、この礎石建物は、松ヶ崎寺、歓喜寺、そして妙泉寺へと継続した寺院内の一堂宇である可能性がきわめて高いといえます。それが16世紀前半頃いったん廃絶したことは、史料とよく一致します。廃絶の後、建物は厚い整地層で覆われました。この整地層は、建物付近で厚さ0.4m、調査区の南端で厚さ1.2mあり、さらに南へ続きます。1993年の調査で出土した東西・南北方向の石垣は、今回の整地層の先端部に造成されたものであったと思われます。厚い整地と石垣の構築は、天正年間の妙泉寺再興の際の造成工事と考えてよいでしょう。そうすると、今回の調査の所見は、松ヶ崎寺から妙泉寺へ、妙泉寺の廃絶、そして再興、現在の松ヶ崎小学校へという当地の歴史的な変遷と実によく一致することとなります。

表 一石五輪塔の銘文

銘 文				西 暦
[法蓮華經	天正三年	妙泉童子	八月廿日]	1575年
[經	天正四年	妙善禪尼忌	七月十三日]	1576年
[蓮華經	天正四年	日掣法印	拾月十四日]	1576年
[妙法蓮華經	天正十年	妙法忌	十一月十一日]	1582年
[華經	天正十一年	妙泉 <small>（再興）</small>	十一月一日]	1583年



写真1 礎石建物と池跡（北西から）



写真2 礎石建物跡（北東から）



写真3 尊勝寺の建物跡（推定五大堂、南から、1986年調査） 平安時代後期



写真4 鳥羽離宮跡第75次調査の建物跡（北から、1982年調査） 平安時代後期